

(参考2) 青年国際交流事業の効果検証に関する検討会報告書 概要

1. 平成26年度グローバルユースリーダー育成事業の評価

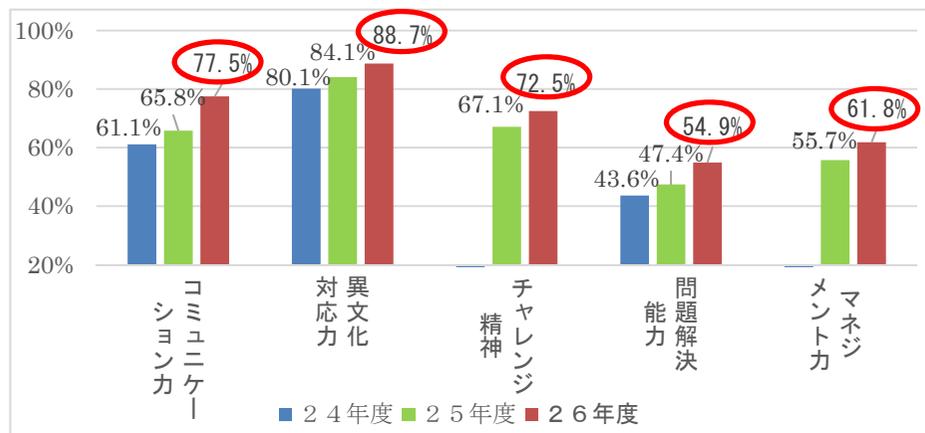
※ 新たに実施した効果測定の枠組み

事業の目的(①参加青年の成長、②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上、③ネットワークの構築と社会貢献活動の促進)に沿って特にグローバルユースリーダー育成事業について実施

①参加青年の成長

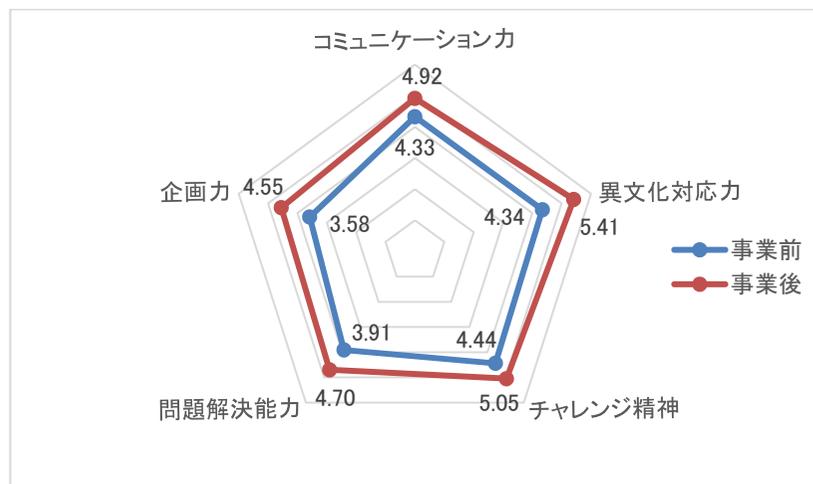
a. 本プログラムが各能力の向上に役立つと思うか(全参加青年へのアンケート)

(5段階評価の「5 非常にそう思う」「4 そう思う」の合計)



b. 自らが各能力をどの程度備えていると思うか(日本青年の自己評価の平均値)

(6段階評価で「6 十分備えている」～「1 まったく備えていない」から選択)



c. 異文化感受性発達調査

参加青年について異文化感受性について一定の客観性をもつ測定指標である「異文化感受性発達調査」(IDI)を用いた専門家による評価を行ったところ、参加青年の違いを受容し、適合しようという態度に問題はなかったものの、事業前～事業後で大きな変化はみられなかった。これは、事業期間の短さが大きな要因ではないかと分析された。

	事業前	事業後
異文化感受性認知度	120.60	120.60
異文化感受性発達度	87.74	87.35

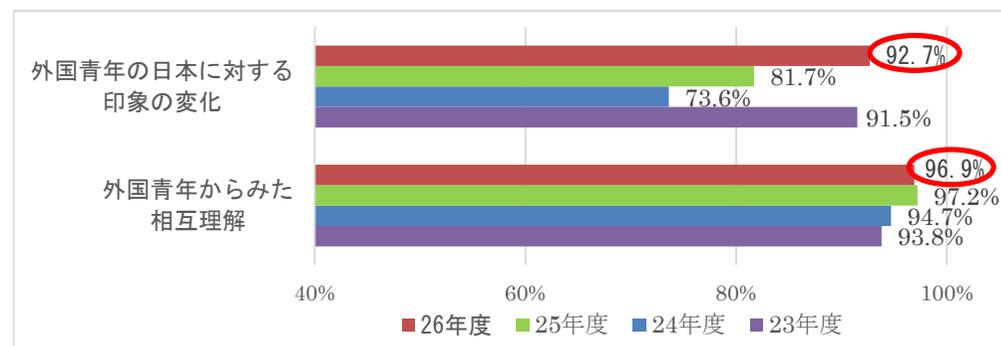
d. 研修講師による定性的評価

- 特に共感呼んだのは、「すべての人がリーダーである」ということ、そしてリーダーをリーダーたらしめるのは信念や志であり、それは誰の中にもあるという考え方であった。(参加青年たちは)自分たちにもその気になればリーダーシップを発揮できる可能性があることを知って少なからず自信と希望を得た様子であった。

②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上

a. 日本に対する印象はプログラムへの参加でどのように変わったか、本プログラムが日本人との相互理解に役立つと思うか(外国青年へのアンケート)

(5段階評価の「5 とても良くなった／非常にそう思う」「4 良くなった／そう思う」の合計)



b. 在外公館、参加国政府からの評価

(在外公館) 本事業は、当該国と日本との関係強化に有用か。

5 非常に有用： 6か国 4 有用： 4か国

(各国政府) 本事業は、当該国と日本との友好関係促進に有用か。

5 非常に有用： 8か国 4 有用： 2か国

※ いずれも3以下の回答はなし。

c. 訪問国での対応

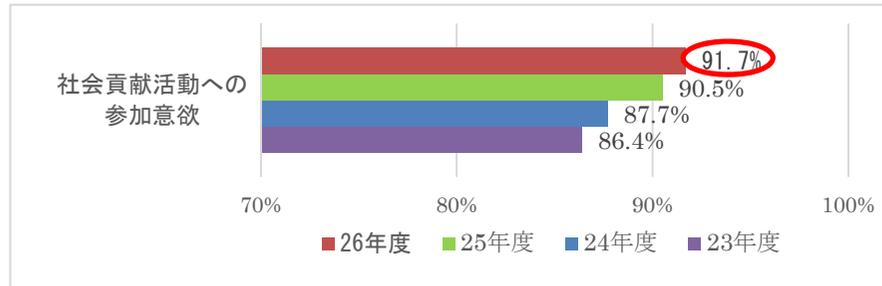
- ニュージーランド：首相・青年担当大臣への表敬訪問等
- スリランカ：青年担当大臣への表敬訪問
- トルコ：首相・青年スポーツ大臣への表敬訪問

③人的ネットワークの構築と社会貢献活動の促進

a. 事業参加を通じて社会貢献活動に参加したいという意欲をもったか

(全参加青年へのアンケート)

(5段階評価の5「非常にそう思う」4「そう思う」の合計)



b. 具体的な社会貢献活動／事後活動の計画内容

(日本) 福島にある震災で両親を亡くした子供のための養護施設で、子供たちに世界について教えたい。夢に向かって進み、国際的な環境に対して積極的になる後押しをする。

(日本) (事業で作ったグループで) 1年に一度「グループの日」を設定し、事業の後何らかの社会貢献を実行することを決定した。

(ブラジル) ブラジルでイスラム教徒に対する理解を広める活動を行おうと計画。さらに、日本で教育・政治問題に取り組む決意を固め、日本で英語教師となることを予定。

(ケニア) 地元の農村地域に給水所を設けることを考えており、そのための助言や指示を得られるようネットワークを活用したい。

2. 効果測定の方角性

- ・効果が長期にわたって発現する事業の特徴にかんがみ、事業中～終了直後／事業から1年後／中長期のフォローアップの計3回に分けて、事業目的に沿って実施する
- ・参加青年の成長については、次世代グローバルリーダーに必要な能力(例 コミュニケーション力／異文化対応力／チャレンジ精神／問題解決能力／企画力／マネジメント力 等)に絞って評価を行うとともに、事業における個人目標の達成度合いについても評価対象とする
- ・「IDI」「事業前～事業後の自己評価」等の新たに導入した調査については、質問方法や実施時期などの改善を加えつつ引き続き実施し、事業に合った効果測定が行えるようブラッシュアップしていく

3. 今後の事業のあり方に関する意見の整理

- ・事業としての目的を踏まえて、個々の参加青年が事業において達成すべき目標を自発的に設定し、自分なりの意図をもって各種プログラムに参加することが望ましい
- ・参加青年が日々の学びを振り返り、統合して、翌日以降に活かしていく時間を取れるようにプログラムを構成するとともに、参加青年同士で成長や課題を確認し合う「ピア・フィードバック」の導入について検討する
- ・ディスカッション、セミナー等の各種プログラムについて相乗効果が出るようカリキュラムを有機的に結合させることが望ましい
- ・リーダーシップを高める観点から、プログラム内容のみならず事業全体を通して参加青年の自主性をより尊重する